書評

中前正志著『寺院内外伝承差の原理　縁起通史の試みから』

横田隆志

本書は挑戦的な一書である。筆者自身、本書を「個別の事象の解明に止まらず、そこから、事象を貫く普遍的な何かを抉り出そうとした挑戦」と述べるが（「あとがき」）、事実そのとおりの研究書であり、その前提として古代から近現代まで視野に収めた「縁起通史」は今まで提起されてこなかった（6頁）。縁起研究は特に説話研究の分野で活発だが、ともすれば個別の事象にとらわれがちな研究潮流を相対化する点に本書の位置があるとも言える。なお本書自体は大変刺激的な試みであるが、筆者の態度はあくまで謙虚であり、資料の博捜に基づく実証的な論述には説得力がある。研究としての基本に忠実でありつつ、いわゆる安全圏に身をおかず、普遍を抉り出す挑戦を試みた点をまずはおさえておきたい。

本書は第Ⅰ部、第Ⅱ部に内容が分かれる。

第Ⅰ部「縁起通史の試み—古代から近現代まで—」では、西国三十三番札所のうち穴太寺・成相寺・華厳寺の個別具体的な「縁起通史」が整理される。筆者はこれを試論A～Cとして提示し、その議論の補強として穴太寺縁起と薬師（『一遍聖絵』巻八第一段の分析）、周防国二井寺、美濃国谷汲念仏池に関わる資料群を取り上げる（付論A～C）。

このうち本書冒頭で論じられるのが、丹波国穴生寺の観音伝承である（試論A）。早い段階の伝承である『扶桑略記』応和二年（九六二）条所引「穴穂寺縁起」には、その話が次のよう記される。宇治宿禰宮成なる檀那が妻の勧めで京から仏師を呼び寄せ観音像を造立させるが、「本性猛悪」な宮成は

大江山で仏師を射殺し、禄物を奪い返す。だが翌日新造の観音像を拝すると、矢が胸に刺さり、血が流れていた。宮成は観音像が仏師の身代わりとなったことを悟る。そして存命だった仏師のもとに赴き、改めて禄物を与えたという。

この伝承は『扶桑略記』以降、多くの変遷を重ねながら、近現代に至る種々の典籍に記録された。その概要を筆者は次のようにまとめる。

本性猛悪であったのが、悪人離れして、ついには仏師を襲うことなど全くなくなったり、対照的に善女人である妻の方にその役割を半ば譲っていたり、あるいは仏師に与えるべき物がないほど窮乏していたと記されていたかと思うと、近世には観音信仰の長者と化していたり、ところが、大正期頃からはまた、長者でも何でもない邪見無慚な男と善女人の妻という組み合わせに回帰していったりと、一定することなく、檀那の人物像が実に様々に揺らいでいるのである。現代に至るまでの穴太寺の縁起通史を右に眺めてきたのだが、それは檀那像の揺らぎの歴史であった、と言ってもいいくらいだろう。(88頁)

右のように要約すればわずか数行であるが、こう結論づけるためには、文字通りの文献の博捜が欠かせない。特に近世以降の資料群の指摘は圧巻であり、本書の白眉だと考える。

なお宝徳二年(一四五〇)重修『丹波国穴太寺観音縁起事』は、『新修亀岡市史』資料編第四巻に全文翻刻があり(41頁)、歴史学等の分野ではしばしば取り上げられるが(33頁)、『今昔物語集』の諸注釈をはじめ日本文学研究の分野では全く言及されないという(33・38・41頁)。右の重要資料が従来見落とされてきた事実は、評者には重く響いた。加えて従来の翻刻には誤読があるため(33頁)、筆者はこれを翻刻し直し、対校まで示す(98~101頁)。今後、穴太寺の右の縁起を取り上げる際に、本書の翻刻はまず参照されるべきである。

第Ⅱ部「寺院内外伝承差の原理—仮説の提示—」では、同じく西国三十三番札所のうち三室戸寺・清水寺と鞍馬寺における寺内寺外の伝承の差異が論じられる。筆者はこれを補論A~Cとしてまとめ、最後に「【仮説提示】寺院内外伝承差—原理への模索—」として結論を示す。つまり本書は試論A~C・付論A~C・補論A~Cの九編の論考によって結論を導く構成をもつ。その結論となる「寺院内外伝承差の原理」は、筆者自身が次のようにまとめている(479頁)。

【原理A】寺院が管理あるいは発信する、開創縁起などの伝承について、同寺院の内部と外部との間での伝承内

容に差異の生じることがあり、その発生事情としてはおよそ二通りの場合が考えられる。寺内にて行われている本伝とは異なる内容を持った異伝が寺外にて発生した場合と、従来行われていた旧伝とは異なる内容を持った新伝が寺内にて発生し、寺外においては引き続き旧伝が行われている場合とである。

【原理B】右のようにして一旦生じた寺院内外伝承差が、すぐには解消されないまま、時代を超えて相当に長期間に亙って存続する場合がある。

【原理C】発生事情の相違に関係なく、また長期間に亙って存続していてもいずれは、寺外で発生した異伝が寺内の本伝によって凌駕され、あるいは、寺外にて存続していた旧伝が寺内の新伝によって凌駕され、すなわち、いずれにせよ内部も外部も寺内の伝承によって統一されて、寺院内外伝承差は解消していく、もしくはそういう傾向を示すようになる。

なお右の状況がおよそ終息するのは大正期前後である(467頁)。その要因を筆者は、西国札所(聯合)会『西国順(巡)礼案内記』の刊行に求める。この書は大正十年以降昭和五十九年に至るまで三十三版を重ねたが(466頁)、「それが各寺から発信されたものに類する性格を持ち合わせていたため、寺内の伝承が普及・浸透する基点の一つとなった」(467頁)という。また右の結論を示した上で筆者は、筆者架蔵の明治二十九年刊『西国三十三所霊験画伝』の影印と翻刻を載せる。一方本書にはコラムも挿入され、補足的な情報を示す。

さて本書の意義は多様な視点から整理可能であろうが、ここでは二点に絞ってまとめる。その意義は第一に、個別の寺院に視座を置いた上で古代から近現代まで資料を発掘し、「通史」として示した点にある。こう書くことは容易だが、実際に調べるのは大変な労力をともなう。特に近世以降は資料が膨大であり、どこからどう手をつけていいかという点ですでに躊躇される。近年の潮流としてはこうした時代の文献も取り上げられてきてはいるが、古代まで視野に含めてこれを論じる研究は稀である。したがって縁起研究に関わる俯瞰的な視座が提供された点は、本書の揺るがぬ価値の一面を示す。もう一つの意義は、寺院内外の伝承に差異があることと、その理由を追究した点にある。資料の単なる羅列ではなく、「寺院内外伝承差」という「縁起通史」を把握するための視座をあわせて提供した点も、本書の価値を明らかに示している。

以上他書にない意義が本書には認められる。しかしこれが今まで提起されてこなかった仮説である以上、当然問題は残されている。本書の提言をどう受け止めればより実りの多い議論が展開可能となるかという点に留意しつつ、以下問題点を整理する。

まず問題となるのは、「原理」を導くには事例数が不足しているのではないか、また寺内と寺外が完全に分けられるのかという点である。これらの点について、筆者はもちろん自覚している（468～469・487頁）。その上で前者については、考察を加えた諸寺院に「寺院内外伝承差」が存在する点について、その実在性自体には疑いを差し挟む余地がないと述べる（446頁）。また寺内寺外の区別についても、「飽くまで傾向を把握しようということであるので、むしろ状況に応じて柔軟に捉えるべきで、柔軟さを手放したがために傾向を見失うことがあってはならない」とする（468頁）。したがって問題は他の寺院等で右の原理がどこまで普遍的に確認できるか、またより厳密に僧や書籍の動向を追う時に、筆者の仮説がどこまで通用するかという点になるだろう。本書では捨象されているが、僧の諸宗交流はきわめて一般的な現象でもあって、その僧がどの立場で縁起を書くかによって記述内容は大きく左右される。縁起を書く僧自身の立ち位置が「寺内」なのか「寺外」なのかという点ですでに微妙な場合が多いことも、ただちに予想されるのである。ただ穴太寺の論考だけで本書では約百頁が費やされている。他の西国札所を含めこれを整理するならば、どのくらいの分量の考察が必要になるだろうか。ただこれを別の視点から捉えれば、それだけ多くの議論の可能性が本書によって示されたということにもなる。筆者への注文というよりは、読者が本書の提言をどう受け止めるかという点がここに関わってもいるだろう。

次に気にかかったのは、縁起伝承を論じる他の研究との接続が希薄な点である。著者が本書冒頭近く（6頁）で参照する堤邦彦・徳田和夫編『寺社縁起の文化学』（森話社、平17）から、試みに冒頭論文である堤邦彦「寺社縁起の転換期―近世から近現代へ」を参照すれば、寺社縁起に関して、寺社縁起の語り手や唱導者間のネットワーク性、絵解き芸能や宝物開帳、略縁起の配布、縁起を道具や素材に用いた近現代の大道芸、口碑伝説や現代民話との関わり、寺社縁起の文化変容を可能ならしめた民俗社会、女性文化圏、都市メディアなどの意味といった多様な論点がまとめて提示されている。これらの問題をすべて受け止めた上で「通史」を描くのは至難であり、議論が拡散することを回避するため論点を「寺院内外伝承差」に絞ったのではないかとは推測するが、それと引き換えに、右の堤論考等で提起された諸問題と本書の仮説がどのような接点をもちうるのかが評者には見えてこなかった。実際、本書冒頭（6頁）で筆者は、縁起の機能や社会的意味はひとまず脇に置くとも述べているので、右の点はすでに織り込み済みかとは考えるが、社会的基盤なくして伝承が存在しえないことは自明である以上、何らかの展望は必要かと考える。例えば本書では、戦後の西国三十三所ガイドブック類（83～86頁）や明治から昭和前期にかけての京都の名所案内（425～427頁）等がそれぞれ数十点一覧化されているが、これらは言うまでもなくツーリズムと関わって出版されたものであろう。近代の巡礼を語る上で欠くことのできないツーリズムの問題と「寺院内外伝承差の原理」とは大きく関わるはずであるが、この点はいかがだろうか。この通史が筆者だけの「通史」になることは望ましくない。とするならば、こうした論点と筆者の述べる「原理」がどう関わるか、筆者の見解を知りたい。

以上いくつかの問題点を整理したが、これによって本書の価値がいささかも減じるわけではないことは強調する必要がある。「縁起通史」自体が初めての試みなのであって、こうした試みに取りこぼしが出てくるのは、挑戦であるがゆえの必然でもあるからである。ここに示したいくつかの問題について、筆者自身から新たな見解が提示されれば大変ありがたい。ただすでに述べたとおり、問われているのは本書を紐解く、評者を含めた読者の側でもある。本書の刊行によって縁起研究が新たな段階を迎えることは疑いないであろうし、実際に新たな議論が活性化することを切に期待したい。

（二〇二一年三月刊　A5判五四八頁　定価四、四〇〇円（10％税込）　法藏館）

――よこた・たかし／大阪大谷大学教授――